

「ちやんぽん、ぼくの魔女」

井上 三



絵
書
原
作

かきかえ
きかえ
きかえ

げんさく
久米
梓

ハ
ン
・
ク
ヨ
ン

みやま
たえこ
宮崎
妙子

くめ
み
梓

この日本語版グレイデイド・リーダーはJGR
プロジェクトグループが開発した試作品です。
販売を目的としたものではありません。この日
本語版グレイデイド・リーダー、及び、JGR
プロジェクトグループに関するお問い合わせは、
igrprj@hotmail.com へお願いいたします。

© 2003 by JGR プロジェクトグループ

てようなはくの魔女
まじょ

登場人物・
ようじようしんぶつ

野崎竜彦・会社員
のざきたつひこ かいしゃいん
32 歳 さい

野崎保子・竜彦の母
のざあやこ たつひこのはは
58 歳 さい

萱島ゆう子・7歳・魔女？
かやしま こ さい まじょ

萱島千絵・ゆう子の母
かやしま ちえ こ はは

萱島登美子・千絵の母、ゆう子の祖母
かやしま とみこ ちえ はは こ そば

60 歳 さい
くらし

萱嶋将之介・千絵の父、ゆう子の祖父
かやしま しょうのすけ ちえ ちち こ そふ

へ行ったり、左へ行ったりしながら滑り続ける。

(魔女……。ゆう子の大切な人は死ぬ……。ゆう子の好きな人は死ぬ……。

ゆう子は魔女か？ ぼくは死ぬのか？ 魔女、魔女、魔女。) 竜彦の頭の中を魔女ということ

ばが走った。車は止まらない。右へ、左へ滑り続ける。真っ白な道の向こうから大きい
車が走ってきた。

「おじさん！(わい！) ゆう子がおおきい声で言った。

「あつ！」 竜彦は大きく目を開けた。(ゆう子。ゆう子が魔女……。魔女？ ゆう子は魔女じ

やない！ ゆう子はぼくの子供だ！ ぼくは、ゆう子に責任がある。ぼくはゆう子に責任を持たなけ

ねばならない。ぼくは……。車を止めなければならない！) 竜彦は強く思った。

「大丈夫だ、ゆう子。ぼくたちは死なない！」

終

萱島源之丞・千絵の弟、ゆう子のおじ

キヤサリン・萱島源之丞の妻、26歳

部長・竜彦の会社の人

藤沢ゆかり・竜彦が結婚したい人

場所・日本(北海道・九州・成田空港)

アメリカ(オレゴン)

(1)

男の人と女の子は親子だろうか？

女の子のお母さんはどこにいるのだから？

北海道の5月。日曜日の夕方。夕方の赤い空の下を車が走っている。赤い車も

黒い車も白い車も走っている。

白い車を運転しているのは野崎竜彦、32歳。青いTシャツにジーンズをはいている。

竜彦の隣には、萱島ゆう子が座っている。ゆう子は、目が大きく、色の白いかわいい7歳

の女の子だ。

「ねえ、ゆうちゃん」とゆう子は運転している竜彦に話し掛ける。「私のお母さんと結婚し

たい？」

「うん。」

「どうして？」

「ゆうちゃん、ゆうちゃんが結婚しても、私はゆうちゃんといっしょにいてあげる。」

「はい、ゆうちゃん。ぼくの子供になれ。もう、どいっくお行くな。」と言って、竜彦はやさしくゆう子

の顔を見た。

「うん。」とゆう子は竜彦の顔を見てうれしそうに笑った。竜彦はゆう子の顔を見ながら、左

の手でゆう子の手を取った。ゆう子はその手を両方の手で強く握った。

その時、車が滑った。

「ゆうちゃん、いっかい！ 前を見て運転して！」

車は滑り続ける。竜彦は、両方の手で運転しようとするが、ゆう子が竜彦の左手を強

く握っている。ゆう子は、いっわくて竜彦の左手をもっともっと強く握る。

車は、滑っている。竜彦は車を止めようとするが、止まらない。車は、止まらないで右

「そうだ。今晚は、おいしいものを食べた後、その人といっしょにホテルに泊まるらしい。」

「おじさんは。」

「ぼくはアパートへ帰る。明日はぼくのお母さんのところへ行く。」

「おじさんのお母さん。あ、北海道の病院に来てくれたおばさん。」

「そうだ。ぼくのお母さんだ。ぼくのお母さんの家でいっしょにお正月をしよう。」

「会社の女の人もいっしょに行くの。」

「行きたいと言ったら、いっしょに行く。」

「おじさん、その人と結婚する。」

「もしゆう子とその人が好きだったら、結婚する。」

「私がその人を好きじゃなかったら。」

「ゆう子が好きじゃなかったら、しないよ。」

「ゆう子ちゃんのお母さんが好きだから。」

「そう……。じゃ、私は邪魔ね。」

「邪魔。邪魔じゃないよ。ゆう子ちゃんのようなかわいい子供がぼくの子供になってくれたらうれしいな。どうして邪魔だと思ってるの。」

ゆう子は竜彦の質問に答えない。

「おじさん、おじさんはお金持ち。」

「いや、金持ちじゃない。でも、一生懸命働いてゆう子ちゃんとお母さんを幸せにするよ。」

「お母さんも私も、今、幸せよ。おじさんはお金持ちじゃない。じゃ、お母さんは考えなければいけない。」

「なにを考えるんだ。」

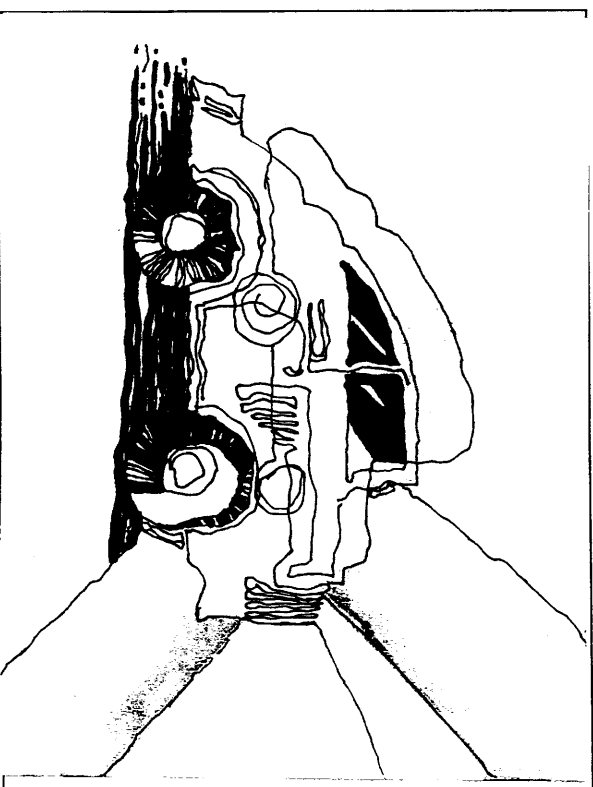
「おじさんはお金持ちじゃない・・・から、お金がほしい。だから、お母さんと私は保険をかける。そして、保険のお金をもらうために私とお母さんを殺すかもしれないでしょう。」

竜彦は驚いてかわいい顔のゆう子を見た。

「おじさん！前を見て運転して！あぶない！」

竜彦は前を見て、言った。

「君は、おじさんがそんなことをすると思ってるの？おじさんは保険の金がほしいから、保険金のためにお母さんと結婚する。結婚し



竜彦は頭を振って、目を大きく開けて前を見た。車の外は真っ白だ。

空港には人がたくさんいる。「おじさあんなー！たくさん人のなかから、ゆう子が走ってきた。そして、竜彦の胸に飛びこんで、大きい声で泣き始めた。

「ゆう子、お帰り。もう大丈夫だ。」竜彦はゆう子を強く抱いた。

雪が降り続けている。真っ白な雪が次から次に降ってきて、前がよく見えない。

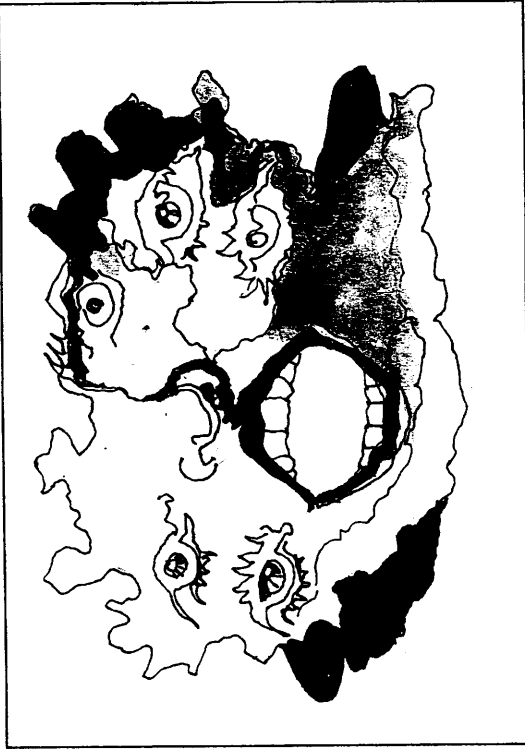
車を運転する竜彦の隣にゆう子が座っている。

「おじさん、おなかすいたよった。」

「そうか？今日はホテルの 레스토랑でおいしいものを食べよう。会社の人といっしょだけれど、いい？」

「その人、女の人？」

（どうしてゆう子は幸せな生活ができないのだろう。次から次に困ったことがおきる。



お母さんの千絵が死んだ。おばあさんの登美子
が死んだ。千絵の弟の源之丞がいなくなっ
た……。ゆう子の大切な人が次から次に
いなくなる。どうしてだろう？ ゆう子の大切
な人、ゆう子の好きな人。うん そうだ ゆう
子の大切な人はみんないなくなる……。み
んな死ぬ？ ゆう子に好かれたら、死ぬ？ じゃ
ゆう子は魔女？ 魔女のような女の子？ 魔女
に好かれた人は死ぬ……。ゆう子に好かれた人
は……。じゃ、ぼくも？)

て、お母さんとゆう子ちゃんに保険をかける、そして、二人を殺す。保険金をもらうために？」

「そんな人がいたでしょう。テレビのニュースで見たよ。」

「ああ、ひどい人がいたね。でも、君は、おじさんとその人が同じだと思っているの？」

ゆう子は答えない。何か考えているようだ。

「おじさん。」とゆう子は言った。「お母さんは何と言っているの？ お母さんもおじさんと
結婚したいと言っている？」

「いや、お母さんはまだ迷っているようだ。お母さんは心配なんだよ。ゆう子ちゃんがぼく
を好きかどうか、お母さんは心配している。だから、結婚するかしないか、迷っているん
だ。」

「そう……お母さんは迷っている……。もしわたしが、お母さんの結婚はいやだと言っ
たら？」

「どうしたら、お母さんは結婚しないよ。」

「じゃ、おじさんはどうする？ 私を殺す？ 私がいなかったら、お母さんは迷わない。お母さんが迷わなかったら、おじさんはお母さんと結婚できる。だから私は邪魔。邪魔な私を殺す。」

「何を言っんだ。ゆう子ちゃん、お母さんの大切な大切な子供だよ。」

ゆう子は何も言わなかった。車の中は静かになった。

「おじさん」とゆう子はまた話しかけた。「お母さんに電話をしたらいいよ。ゆう子を返してほしいか？ ゆう子を返してほしかったら、ぼくと結婚しろ。」

結婚しなかったら、ゆう子を返さないと言えはいよ。」

「いいんだよ、結婚できなくても。無理ならしかなかったら。」

「おりがどう。ホテルの部屋も予約した。」

「ええ。」

「申し訳ないけど、今晚はゆう子と二人で泊まってくれない？ ぼくはアパートに帰る。」

「いいね。ゆう子ちゃん、友達にならいたし。いい機会よ。」

「いい機会。おりがどう。じゃ、ぼくはこれから空港へゆう子を迎えに行く。飛行機は16時から着くから、6時半にホテルへ行けると思う。」

「雪が降っているね。道が滑るから危ないね。運転に気を付けてね。」

(12)

ゆう子はこれからの生活になるのだろうか。

竜彦はゆかりと普通の幸せな結婚ができるだろうか？
それとも・・・？

「三日も寝ていないのに、空港まで車で行って大丈夫？運転できる？」とそばの女性の人が言った。

「大丈夫、大丈夫。じゃ、みなさん、さようなら。」

「運転に気をつけて。」と女性の人が言った。

部屋を出た竜彦はポケットから携帯電話を出し、ボタンを押した。

「もしもし、ゆかりさん。野崎です。今日のホテルの予約はできています。」

「ええ。この前行ったホテル。レストランは6時半から。」

「悪いけど、三人で食事したいんだ。ゆづ子がアメリカから帰ってきた。」

「あら、そう。クリスマスのお休み？ホテルは大丈夫だと思うわ。ホテルに電話をして、食事は二人じゃなくて三人だと言うわ。」

「え？じゃ、おじさんは、お母さんを愛していないの？」

「いやな子供だな。子供がいると結婚はむずかしい」と竜彦は心の中で思った。

「おじさん」とゆづ子はまた口を開いた。「お母さんと結婚して赤ちゃんが生まれたら、私たちが邪魔になるでしょう？赤ちゃんがかわいいから。」

「7歳の子供が何を考えているのだろう？」竜彦はこわくなった。

「こんなにかわいい顔をしているのに、頭の中で何を考えているのかわからない。」

運転しながら、竜彦は思った。（この子を育てた千絵さんを、ぼくはよく知っているのだから）

「うか？千絵さんと結婚して、ぼくたちはいい家族になれるのだから？」

これまで、ゆづ子の母・千絵と結婚したいと思っていた。けれど、今、千絵との結婚を迷い始めた。

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を抱きしめて、「さあ、家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがとう、おじさん。楽しかったね。まだ、行こうね。」

ね。まだ、行いくなね。」

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「そろそろ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。

「どうもありがとー、おじさん。楽しかったね。まだ、行いくなね。」

「ふん……」

「なまじつにしてほしひ。』と言つたの。そして、その夜、一人で車椅子で出かけたの。」

「うん……。」

「キヤサリンは『私が悪かった』と言って泣いていたの。『源之丞は帰ってこないかもしれない。私が離婚したいと言ったから、帰ってこない。帰ってこないにちがいない。』と言っている。私はキヤサリンの家に、源之丞おじさんのいない家にいることができた泣いていた。私はいから、日本に帰ってきたの。でもおじいちゃんのことく行けない。おじいちゃんは何もわからなくなってしまうのだ。私、行くところがないの。おじさん、迎えに来て……。」「わかった。行くよ。行くから、ゆづ子、心配しないで北海道へ来い。」「うん、おじさん、ありがと。」「

電話をきつて、竜彦はまわりの人に言った。「ほとんどの子供が帰ってきた。アメリカから帰ってきた。今から、空港へ迎えに行きます。」

「どうして？」

「^{いえ}家を出たまま、^{かえ}帰ってこないの。」

「^{いえ}家を出たまま^{かえ}帰ってこない？ どうして？」

竜彦の大きい声^{おお}を聞いて、部屋の人々はみんな竜彦を見た。

「キヤサリくんが離婚^{りこん}したいと言ったの。源之丞^{げんのじよう}おじさんの足はよくなりそうなの。歩く
ことができないそうなの。だから、キヤサリくんは、『源之丞^{げんのじよう}おじさんが好き。でも、源之丞^{げんのじよう}
おじさんといっしょに生活^{せいかつ}できない、離婚^{りこん}したい』と言ったの。キヤサリくんは『^{わたし}私はまだ
6歳^{さい}で、まだまだ若い。これからしたいことがたくさんあるから、歩けない人の世話^{せわ}が
できない。だから離婚^{りこん}したい』と言ったの。」

「それで、源之丞^{げんのじよう}さんは出ていったのか？」

「そう。源之丞^{げんのじよう}おじさんは、『キヤサリくんの気持ち^{きもち}はよくわかる、ぼくは大丈夫だから好き^{だいじようぶ}」

「いや、もう行かない。さ、車^{くるま}を降りて家^{いえ}に入りなさい。」

「おじさんは、お母^{かあ}さんに挨拶^{あいさつ}しないの？ 『こんばんは』と言わないの？」

「言わないよ。もう遅^{おそ}いから。はやく降りて家^{いえ}に入りなさい。ママで見ているから。」

「でも、おじさん。」とゆう子が言った。「^{わたし}私が家^{いえ}に入ったら、悪い人がナイフを持って、
お母^{かあ}さんに『金^{かね}を出せ』と言っているかもしれないわ。そうしたら、おじさん、どうする？
お母^{かあ}さんに挨拶^{あいさつ}しなければいけないわ。『だいま。今、帰^{いま、かえ}ってきました。』と言わなければ
いけないわ。」

「わかった、わかった。挨拶^{あいさつ}しよう。『帰^{かえ}ってきました』と言おう。今夜^{こんや}が最後^{さいご}かもしれない
から。」

竜彦は車^{くるま}を降りて、小さいゆう子の手をとった。

(小さくてやわらかい手だな。) 竜彦の心が優しくなった。

家のドアが開き、中からゆう子の母、千絵が出てきた。ゆう子とよく似た美しい顔、長い髪。まだ2歳か3歳に見える。「ただいま」とゆう子は元気に言った。

「今日は本当におりがとびぎりました。おかげさまで仕事が全部、終わりました。私も一緒に緒に行きたかった。」と千絵は竜彦に言った。そして、ゆう子を見つけた。「ゆう子、来たかった？おじさんと一緒によかったね。」

竜彦は千絵に挨拶をして、車に乗った。ゆう子が「さようなら。おりがとび。」と言いなから手を振った。

(2)

夜、千絵が病気になって病院へ行った。千絵はじつなるのだらう？

小さいゆう子はひとりで大丈夫だろうか？

「おひしひ、おひしひ。おひしくて毎晩、泣いているよ。」と竜彦は全然おひしひがせせんと言った。

「おじさん、おひしひでしよう。だから、私、帰ってきてあげた。」

「えっ？」

「今、成田についたとさ。これから北海道行きの飛行機に乗る。16時35分に着くから、おじさん、迎えに来てくれる、荷物が重い。」

「なんだって？ゆう子、キヤサリが『日本へ帰れ』と言ったのか？とっしんだんだ？」

「おじさん……。源之丞おじさんがいなくなってしまったの……。」と電話の向こうでゆう

子が泣きだした。

「なんだって？ゆう子……。おしおし、ゆう子……。とっしんだんだ？」

「源之丞おじさんがいないの……。」

「早く家へ帰って寝たほうがいい。」

「部長、今日はクリスマス・イヴですよ。家に帰って寝る。そんなことはできません。ゆかりさんといっしょにホテルで食事、ね？野崎さん。」

とそばの女の人が竜彦を見て笑いながら言った。

「早く結婚しろよ。」と男の人が言った。みんな、竜彦の顔を見て笑った。

その時、電話が鳴った。

「はい、え？野崎？はい、います。少しお待ちください。野崎さん、電話。」

「はい、野崎です。」

「おじさん。」

「ゆづ子？ゆづ子……元気がどうしている？そちらのクリスマスはどう？今、何時だ？」

「おじさん、ゆづ子がいなくなっちゃっしいでしょう。」

助けてくれる人はいるだろうか？

二日後の午前二時、竜彦のアパートの電話が鳴っている。竜彦は、ベッドで寝ている。電話は鳴り続けている。竜彦は目をさました。「もしもし」電話の向こうで、ゆづ子が大きい声で言った。「おじさん！お母さんが病気の。助けて。」

「お母さんが病気？それならお祖母ちゃんがおばさんに電話をしな。今、午前二時だよ。」と竜彦は怒って言った。

「お祖母ちゃんは遠くにいるの。九州にいるの。」

「じゃ、おばさんに電話しろよ。」

「おばさんはいないの。おじさん、助けて。お母さんが死にそうなの。」電話の向こうのゆづ子が泣いている。

竜彦は（仕方ないなあ）と言いながら、グッドから出た。「じゃ、救急車を呼ぶ。１１９だ。いいか？すぐ行くから。」

竜彦はゆう子の子に家に着いた。救急車が家の前に止まっていて、ゆう子が車のそばにいた。ゆう子は黒いかばんを大切に持っている。「おじさん。来てくれてありがとう。」

「そのかばんは何？」

「これ？お母さんがいつも言っていたの。大切なものが入っているから、何かあったら持つていきなさいって。」

「こ親戚の方ですか？」と救急車の人が竜彦にきいた。

「いえ。この家の近くに住んでいます。」

「あ、そうですか。病気の人は救急車の中です。急いでください。この子供と一緒し

いひ。」

二人は、楽しそうに話しながら、白い道を歩き続ける。

(11)

クリスマス・イブにゆう子から電話があった。ゆう子はミミに話しているのだらう。

竜彦とゆかりのクリスマス・イブはじりになるのだらう。

源之丞とキヤサリはじりしたのだらう。

部屋のドアが開いて、竜彦が入ってきた。とても疲れた顔をしている。

「ああ、終わった。今年の仕事は全部終わった。」竜彦が言いつつ、苦勞さん。野崎

君、目が真つ赤だよ。」と部長が大きい声で言った。

「はい、三日間、寝ないで仕事をしましたから。」

「ゆかりさん スキーは好き？」

「ええ、大好き。」

「冬の休みに、どこかスキーに行こうか？」

「ほんとにうれしいー」

「どこがいいかな？」

「考えましょう、いつしよに。クリスマスに。」

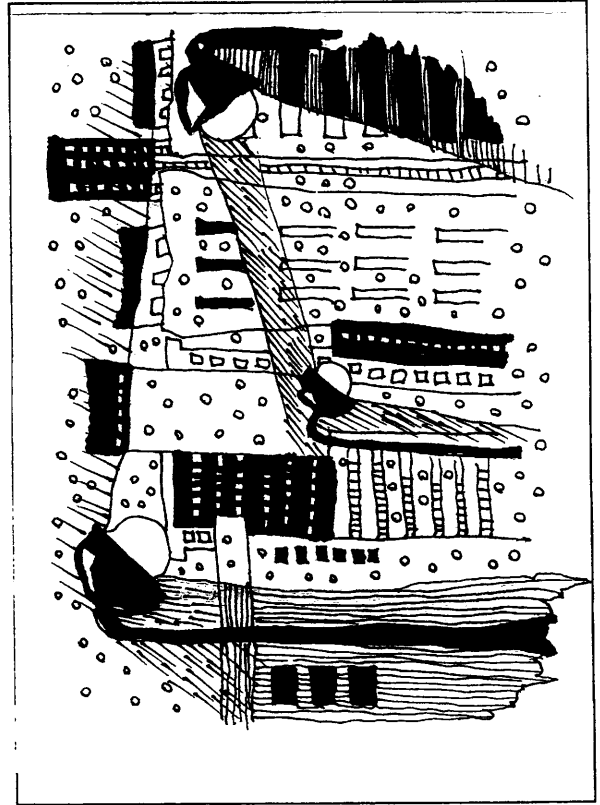
クリスマスは時間がある？」

「ああ、今はとても忙しいけれど、クリスマスは大丈夫だと思う。」

「そう、よかった。じゃ、ホテルのレストランで食事をする？予約しておく。」

「よし、食事をする？予約しておく。」

12月24日、クリスマス・イブね。何時が



よに救急車に乗ってください。いつしよに病院へ行ってください。」

救急車が病院に着いた。病院から

3, 4人の看護婦が出てきて、千絵を手術室

へ運んだ。竜彦とゆう子も手術室へ行き、

部屋の前の椅子に座った。一人は心配そうに

手術室のドアを見ている。竜彦はゆう子に

小さい声できいた。「お母さんはどうしたの？」

「頭が痛い、痛いと言ったの。それで、お

じさんに電話したの。」



「親戚の人に来てもらわなければならない。近くにいる人はだれ？」

「おばあちゃん。」

「おばあちゃんは九州だろ。」

「そう、九州よ。」

「ほかにいないのか？」

「お母さんの弟がいる。」

「じゃ、その人に電話しなければ、どこにいるの？」

「アメリカ。」

「えっ？アメリカ？アメリカのどこ？」

「オレゴン。」

「じゃ、すぐ来られないじゃないか。お父さんの親戚は？」

「お父さんの親戚？知らない。」

「じゃ、しかなない。おばあちゃんに電話しよう。電話番号がわかるか？」

「源之丞、病気になるたり、事故にあつたり、死んでしまつたり……。あの家族にはいる人なうがやう。どうしてだろ？」

「いや、ゆう子とはさうならをしたんだ。ゆう子のことではもう聞かれよう。」

「ぼくももう32歳。普通の幸せな家族を持つことを考えよう。」

(10)

竜彦は、普通の幸せをみつけることができるだろうか？

北海道に、初雪が降つた。これから寒くなる。

街の木々も道も真つ白だ。白い道を、竜彦とゆかりが手をつないで歩いている。

ゆかりは背が高く、髪が長くてきれいな女の人だ。青いコートを着て、黒くて長い靴をはいている。

「みなさん、長い間、休みました。すみませんでした。」竜彦は頭を下げた。

夜、竜彦は会社の人たちといっしょにビールを飲んでいる。部長が来て、竜彦の前に座った。竜彦は部長のグラスにビールを入れた。

「おい、野崎君。」と部長はビールを一口飲んでから言った。「いい人があるんだ。結婚しないか？」

「結婚？結婚ですか……。結婚、家族……。いいですね。普通の幸せな家族がいいですね。家族がないのは淋しいですから。」

「あ、野崎君、そう？結婚したい？それはいい。いい人があるんだ。紹介しよう。」

(結婚か……。) 竜彦は心の中で思った。(ゆう子はどうしているだろう。アメリカで楽しく生活しているだろうか。ゆう子の母の千絵、祖母の登美子、祖父の将之介、千絵の弟

竜彦は携帯電話をポケットから出した。ゆう子はかばんの中を探して小さいノートを見つけた。

「あつた。おばあちゃんの電話番号。」

竜彦はボタンを押して、ゆう子に携帯電話を渡した。

「もしもし、おばあちゃん。わたし、北海道のゆう子です。おばあちゃん、寝ていた？ごめんなさい。あのね、お母さんが今、入院したの。ちよっとおじさんに代わります。」

「あ、初めまして。野崎と申します。私はゆう子ちゃんの家近くに住んでいますが、千絵さんが救急車で運ばれて、入院されたんです。はい、はい、そうです。それで、すぐに手術をしなければならないそうです。できるだけ早く北海道に来ていただけませんか？ゆう子ちゃんが一人で大変ですから。」

電話の向こうの人が言った。「お世話になります。でも、私も今ちよっと大変で、北海道

いけないんです。もう少し、二人のことをお願いできませんか？」

電話を切って、竜彦は入院のための書類を書き始めた。書類を隣から見ていたゆう子がいいた。「おじさんの名前は竜彦？」

「そうだよ。いい名前だろう？でも、本当に親戚の人はいないの？」

「うん、いない。だから、お母さんにはおじさんがとても大切だったの。おじさんが『お母さんと結婚しない』と言ったでしよう。お母さんは『悲しい、悲しい』と言って毎晩、泣きながらお酒を飲んでいたの。ね、おじさん、お母さんの手術が終わるまで、ここにいます。にいて。」

竜彦がやさしくなずくと、ゆう子は安心して目を閉じた。

(3)

竜彦とゆう子と千絵は、いっ、とで知り合ったのだらう。

「長い話？長い話は暇な時に聞くとよ。で、これは何だ？」と部長は辞表と書いてある白い封筒を手にとって、竜彦に言った。「2ヶ月も会社を休んで、久しぶりに会社へ来た。会社へ来たのは、この辞表を出すためか？この会社はとても忙しいんだ。それを知っているのに、辞表を出すのか？」

「でも部長、私が電話で『休ませてください』と言ったら、会社をやめて、辞表を出せとおっしゃったじゃないか。」

「ああ、あの時は……。い、い、いから、早く仕事をしろ。仕事は山のようにあるんだ。」と書いて部長は竜彦の「辞表」と書いた封筒を破って捨てた。

竜彦は自分の机に行くと、部長が今までよりもっと大きい声で言った。

「野崎君が会社へ帰ってきた。今晚は、みんなで飲もう。」

部屋の中から「オー」という声があった。みんな、嬉しそうだ。

「おう、野崎君」と部長が大きい声で言うと、部屋みんなが竜彦を見た。

部長は40歳くらいのおお、おとしひと、こえおお、声も大きい。

「長い間、休みました。申し訳ありませんでした。」と竜彦は部長の前に行き、ポケ

ットから白い封筒を出した。封筒の上には「辞表」と書いてある。

「なんだ？辞表？この会社をやめるのか？新しい仕事をみつけたのか？」と部長が言った。

「いいえ、これから探します。昨日、北海道へ帰ってきました。」

「どこから？」

「オレゴンからです」

「オレゴン？」

「はい、アメリカです。」

「アメリカ……。何をしていたんだ？」

「いろいろ大変なことがありましたので。とても長い話です。」

安心して寝ているゆう子の隣で、竜彦は思い出していた。

——3ヶ月前の日曜日だった。

千絵がカートを押しながらスーパーの中を歩いている。美しい千絵の隣には、かわいいゆ

う子がいる。二人は楽しそうに話しながら食べ物を選んでカートに入れている。

二人はレジでお金を払い、品物を袋に入れ始めた。

「あらあら、こんなにたくさん買ってしまった。重くて持って帰れないわ。困ったわね。どうしよう？」と千絵が言った。

「大丈夫。私が見つから。うわっ、重い。」二人は幸せそうに大きい声で笑った。

竜彦は、ゆう子の隣で牛乳や卵を袋に入れていたが、楽しそうな二人の話を聞いていつしよに笑ってしまった。

かわいいゆう子^こが竜彦^{たつひこ}の顔^{かお}を見てまた笑^{わら}った。

「ほくの車^{くるま}に乗^のつたらいいよ。家^{いえ}まで送^{おく}つてあげよう。」

「うわっ、嬉しい。お母^{かあ}さん、よかったね。」

あの日^ひから、週^{しゅう}末^{まつ}はいつも三人^{さんにん}でドライブした。いつも三人^{さんにん}だった。――

(三人^{さんにん}だったから、千絵^{ちえ}さんと二人^{ふたり}だけで話^{はな}したことはなかったなあ。)と

ゆう子の寝顔^{ねかお}を見^みながら竜彦^{たつひこ}は思^{おも}った。

(4)

千絵^{ちえ}のお母^{かあ}さん・ゆう子^このおばあさんは病院^{びょういん}へ来る^{くる}ことができたのか？
千絵^{ちえ}の家族^{かぞく}はどんな人^{ひと}たちだろうか？

(9)

竜彦^{たつひこ}は北海道^{ほっかいどう}へ帰^{かえ}った。

新しい仕事^{しごと}がみつかるだろうか？

飛行機^{ひこうき}が北海道^{ほっかいどう}の空港^{くうこう}に着^ついて、中^{なか}からかばんを持^もった人^{ひと}が降^おりた。

(ああ、終わ^おった、終わ^おった。ぜんぶ終わ^おった。明日^{あした}から、仕事^{しごと}を探^{さが}そう。)

竜彦^{たつひこ}は青^{あお}くてきれいな北海道^{ほっかいどう}の空^{そら}を見^み上げた。

広い部屋^{ひろいへや}にたくさんの人^{ひと}がおり、机^{えいそ}の上^{うへ}にはコンピューターが並^{なら}んでいる。

コンピューターの前^{まえ}で仕事^{しごと}をしている人^{ひと}も、電話^{でんわ}で話^{はな}している人^{ひと}もいる。話^{はな}し合^あっている

人^{ひと}たちもいる。男^{おとこ}の人^{ひと}も女^{おんな}の人^{ひと}も若^{わか}い。

ドアが開^あいて、竜彦^{たつひこ}が部屋^{へや}に入^{はい}ってきた。

リンが「ゆう子は学校へ行かなければなりません。休みに連れて行ってあげます。」と言った。

「はい。」とゆう子は答えた。

「ほくは、明日、日本へ帰ります。仕事がありますから。」と竜彦が言った。

「おじさん、会社をやめさせられたのでしょうか。私を九州へ連れて行ったり、アメリカまで連れて来なければならなかったから。」

「えっ？そうでしたか。それは、本当に申し訳ありません。」と源之丞は頭を下げた。

「いえ、いいんです。私の仕事はコンピューターです。コンピューターの仕事は、簡単に探すことができます。」と言って、竜彦はおいしそうにサンドイッチを食べた。

手術室のドアが開いた。

「先生、手術は……。」竜彦は立ち上がってきた。ゆう子はよく寝ている。「終わりました。手術はうまくいきました。が、まだ安心できません。血がたくさん出たんです。私のできることは全部しました。あとは、病人が頑張るだけです。」
「どうもありがとうございます。」

竜彦は頭を下げた。

手術室のドアが大きく開いて、千絵を乗せたベッドが3、4人の看護婦に押されて出てきた。ゆう子も目をさまし、竜彦といっしょに千絵を見た。千絵は白い包帯で頭を巻かれ、目を閉じている。「お母さん」とゆう子は心配そうに、包帯で頭を巻かれた千絵に呼びかけた。

「大丈夫よ。お母さんはよく頑張ったわ。今、薬で寝ているの。もう少し待ってね。お

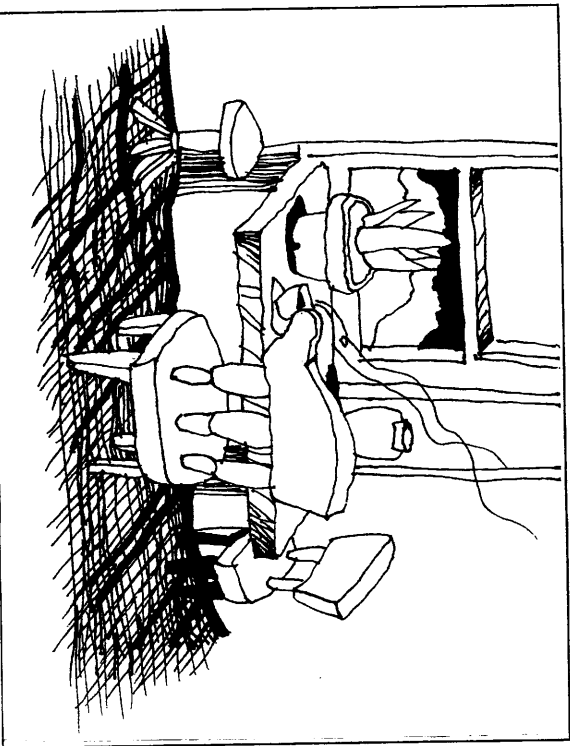
母さん、もうすぐ目を覚めますから。」と看護婦が言った。それから、竜彦を見て、「病人をこれから病室へ運びます。2、3日はだれかこの病人のそばにいてください。」と言った。

「はい、だれか親戚の者が来ると思いますが、もう一度電話を試してみます。」千絵が病室に入ったのを見て、竜彦はポケットから携帯電話を出した。ゆう子に電話番号を教えてもらい、竜彦はボタンを押した。

「もしもし、北海道の野崎ですが、おはようございます。今、手術が終わりました。手術はうまくいったそうです。でも、血がたぐさん出たそうです。それで、まだ安心できないそうです。それで、2、3日は親戚の人にそばにいてほしいそうです。」竜彦が言くと、電話の向こうでゆう子の祖母が言った。

「本当に、本当に有難うございます。すぐに北海道に行きたいのですが、私の夫が、

「食べてから取りに行らう。おじさんぬ、この家に泊まるのでしよう。」
「泊まってください。いつまでも泊まってください。速い日本からいらっしゃったのですから。」と源之丞が言った。「ぜひ泊まってください。オレコつにも、いいところがたぐさんあります。源之丞の車を使ってください。そして、どこでも好きなところへ行ってください。そうだ、源之丞もいっしょに行くといい。」とおいしそうなコピーを大きいカシメに入れて、から、キヤサリベが言った。
「私も行きたい。」とゆう子が言くと、キヤサ



いて、^{ほんとう}本当によかったです^{おも}と思います。これからは、お父さんとお母さんがいる普通の^{ふつう}子供の^{こども}生活^{せいかつ}ができますから。」

一人^{ひとり}が話^{はな}しているよ、ゆう子^こがきだ。

「おじさんたち、こはんですよ。」

ゆう子^こは、源之丞^{げんのじやう}の車椅子^{くるまいす}を押して食事^{しょくじ}の部屋^{へや}へ行^いった。

竜彦^{たつひこ}もゆう子^この後^{あと}から食事^{しょくじ}の部屋^{へや}に入^{はい}った。

テーブルの上^{うえ}には、パン、チーズ、ハム、サラダなどいろいろなものが置^おいてある。

「好きなものをつとて、サンドイッチにして食^たべるのよ。」とゆう子^こが言^いった。

「おいしそうだな。あ、そろそろ、ゆう子^このかばんはまだ車^{くるま}の中^{なか}だ。取^とりに行^いかなければなら^ない。」と竜彦^{たつひこ}が言^いった。

あ、千絵^{ちえ}の父^{ちち}ですが、病^{びやう}気で私^{わたし}が世話^{せわ}をしなければなら^ないのです。毎^{まい}日の世話^{せわ}が大変^{たいへん}な



んです。私^{わたし}も体^{からだ}が弱^{よわ}くて……。それで、千絵^{ちえ}に九^{きゅう}州^{しゅう}に帰^{かえ}つてきてほしいと思^{おも}つていたのです。」

「はあ……それは大^{たい}変^{へん}ですね。千絵^{ちえ}さんの兄^{きやうだい}弟^{おとうと}は？ 弟^{でい}さんがいらつしやるのでしょ^うう？」

「それが、アメリカにいまして、帰^{かえ}つてくるのはちよつと……。」

「遠^{とほ}くて大^{たい}変^{へん}でしょうけれど、千絵^{ちえ}さんが死^しぬかもしれないのですよ。お帰^{かえ}りになれな^いでしょうか。電^{でん}話^わをなぞいましたか？」

「はい、すぐに電話をしたのですが、息子^{むすこ}は、千絵^{ちえ}の弟^{おとうと}ですが、二日前に事故にあつて入院^{にゅういん}しているらしいのです。手術^{しゅじゅつ}をしたばかりだから、息子は帰る^{かえ}ことができません。

息子の妻^{つま}がアメリカ人で、日本語^{にっぽご}がよくわからないんです。ですから、アメリカ人の妻^{つま}が北海道^{ほっかいどう}に行つても、なにもできないでしょう……。本当にすみません。」

「それは大変ですね。でも、私も^{わたし}困ります。ほかに親戚^{しんせき}の方はいらつしやいませんか？」

「ええ、いないんです。私は兄^{あに}弟^{おとうと}がいません。千絵^{ちえ}の父^{ちち}には、弟^{おとうと}が二人います、一人は家族^{かぞく}みんながオーストラリアに住^すんでいます。もう一人はもうなくなりました。」

「はあ……。じゃ、ゆうちゃんのお父^{ちち}さんはどうでしょうか？ ぼくはよく知らないのですが、もうなくなつたのでしょうか？ 千絵^{ちえ}さんは離婚^{りこん}したと聞いていますか。」

電話^{でんわ}の向^{むか}ひが静^{しず}かになつた。竜彦^{たつひこ}の質問^{しつもん}に答^{こた}えたくないようだつた。

ギヤサリ、そんな人^{ひと}ですね。

「ええ、ギヤサリ、はじめても億^{えき}しい人^{ひと}です。ゆう子を可憐^{これい}がつてくれると思^{おも}います。」

「ゆうちゃんも、今度は幸^{さい}せになれますね。お母^{かあ}さんもおはあさんもお、亡^なくなつてしまひました。お父^{ちち}さん亡^なくなつたと聞いています。」

「ゆう子^こには、お父^{ちち}さんはいないのです。」

「ええ。」

「姉^{あね}は結婚^{けっこん}しませんでした。結婚^{けっこん}しないで、ゆう子を産^うんだのです。」

「そうですね。千絵^{ちえ}さんのような人^{ひと}を捨^すてるなんて、ばか男^{おこ}だ。」

「いや、姉^{あね}が相手^{あいて}の人^{ひと}を捨^すてたのです。姉^{あね}は、結婚^{けっこん}するつもりはなかつたのです。でも、子供^{こども}はほしいと言^いつていました。」

「そうですね。でも、千世^{ちよ}にはお父^{ちち}さん必要^{ひつよう}ではないでしょうか？ 千絵^{ちえ}さんに弟^{おとうと}が

「はじめまして。野崎^{のさき}です。ゆう子^こちゃんを連れてきました」

「萱島^{かやしま}源之丞^{げんのじやう}です。たいくんお世話^{せわ}になりました。本当に有難^{ほんとう ありがた}うございました。」

「一人は挨拶^{あいさつ}をした。千絵^{ちえ}の弟^{おとうと}の源之丞^{げんのじやう}は、へいさんだ。

「足^{あし}はいかがですか？」

「おかげさまでだいぶよくなりました。でも、まだ歩^{ある}けません。車椅子^{くるまいす}に乗^のっています。」

「大変^{たいへん}ですね。大変^{たいへん}なのに、ゆう子^こちゃんを連れてきてしまいました。」

「はい、ゆう子^こは私^{わたし}たちが育てます。キヤサリは、仕事^{しごと}をしながら私^{わたし}の世話^{せわ}をし、これからはゆう子^この世話^{せわ}もしなければなりません。でも、ゆう子^こはひとりで何でもできると言^いっています。私^{わたし}たちのことは心配^{しんぱい}ありません。」

「ええ、ゆう子^こちゃんは、元気^{げんき}でいい子供^{こども}です。新^{あたら}しい生活^{せいかつ}も心配^{しんぱい}ないと思います。」

電話^{でんわ}の向^むうから声^{こゑ}が聞^{きこ}えた。「ゆう子^この父親^{ちちおや}はなくなりました。ゆう子^こが生まれてすぐになくなったのです。名前^{なまえ}を一郎^{いちろう}さんといいましたが、この一郎^{いちろう}さんの家族^{かぞく}は一郎^{いちろう}さんが千絵^{ちえ}と結^{けつ}婚^{こん}することに反対^{はんたい}でした。私^{わたし}は、一郎^{いちろう}さんの家族^{かぞく}がどういう方^{かた}たちなのか、ぜんぜん知^しらないのです。」

「だけど、ゆう子^こちゃんは一郎^{いちろう}さんの子供^{こども}ですから、一郎^{いちろう}さんの家族^{かぞく}がゆう子^こちゃんの世話^{せわ}をしてもいいでしょう。普通^{ふつう}の時^{とき}ではないんですから。」

「はあ……。本^{ほん}当^{とう}にすみません。一郎^{いちろう}さんの家族^{かぞく}が今^{いま}どこに居^いるのかも知^しらないのです。千絵^{ちえ}は知^しっているかもしれませんが。本^{ほん}当^{とう}にすみません。今^{いま}お願^{ねが}いできるのは、あなただけなのです。」

「それは、まあ、できることはしますが、ぼくは男^{おとこ}です。結^{けつ}婚^{こん}もしていませんから、女性^{じよせい}の千絵^{ちえ}さんや子供^{こども}のゆう子^こちゃんの世話^{せわ}はできないんです。」

「すみません。どうぞよろしくお願ひします。ぜひ野崎さんにお任せします。」

「いやあ、それは困るのです。責任はとれません。」

「けっ、んです。責任をとらなくてはなりません。なんとしても何も言ひません。お任せしたんですから。」

「ほくのことを何も知らないのに、大切な千絵さんをほくに任せるのですか?」いえ、野崎

さんのことは千絵から聞いています。ですから、私は野崎さんを信じているのです。私、た

ちのお願ひは手紙に書きますから、住所を教えていただけませんか?それからお電話

番号も。」

竜彦は、しかたがないと思ひながら、住所と電話番号を教えた。

「有難うございます。では、よろしくお願ひします。」

「あのう、千絵さんはほくのことをお母さんに話していただけますか。ほくが千絵さんに初めて

でも、アメリカではこのような家は普通です。」とキヤサリが言った。

「どんなお仕事をなさっているんですか。」と竜彦がきいた。

「テレビの仕事です。」

「キヤスター?」

「いえ、キヤメラマンです。」

「ああ、そうですね。」主人は?」

「主人はアメリカにある日本の会社で働いていました。今は、会社を作つてひとりで

仕事をしています。」

大きい声が階段から聞へた。「おねい。ゆう子。元気で着いたか?」

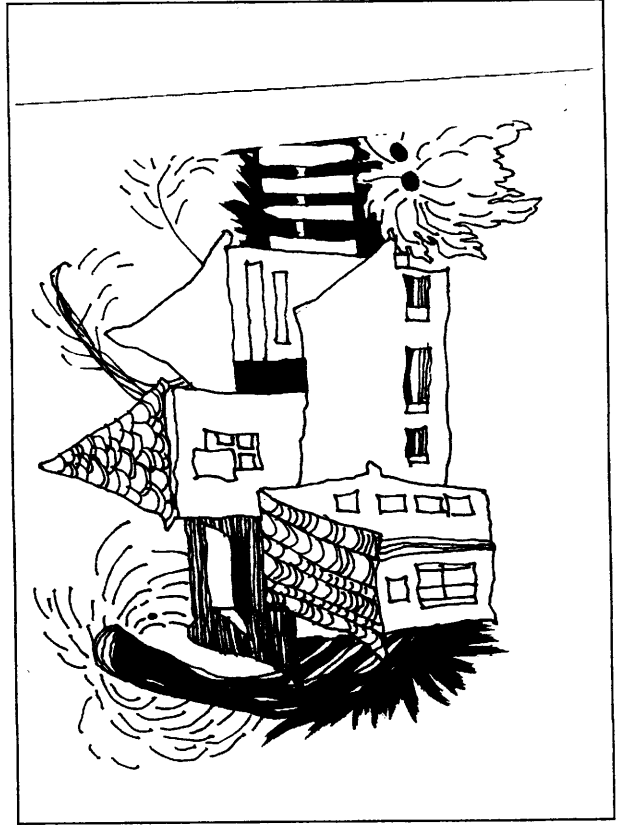
「あ、おじさん。源之丞おじさん!」ゆう子は走つて階段を上がつた。

竜彦も階段を上がつて2階へ行った。

30分くらい走って、車は白い家の前で
止まった。家の前には広くてきれいな庭が
ある。庭にはプールもある。遠くには白い
山々が見える。白いは雪だ。

「すばらしい！いいところだなあ！大きい
家と広い庭。」と竜彦はあちろちろを
見ながら言った。

「日本は家が高いそうですね。日本では
お金がなかったら、このような大きい家には
住めない、と源之丞が言っていました。」



会ったのは3ヶ月前なんです。」

「ええ、ええ。聞いています。野崎さんはいい方で
できたら結婚したいと千絵は言っていました。でも
子供がいるから恥ずかしいだろうと言っていました。
ゆう子がいいますから。」

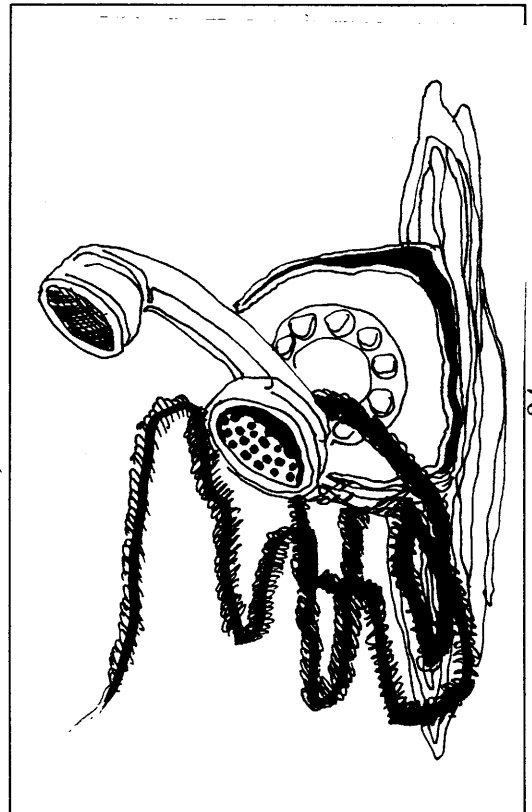
「そうでしたか・・・。」

「あ、すみませんが、ゆう子に代わっていただけです
から、ちよつと話したいことがあります。」

「あ、はい、今、代ります。」

竜彦は電話をゆう子に渡した。

「もしもし、おはあちゃん、ゆう子です。はい、はい、



わかつた。おばあちゃんも元気でね。」ゆう子は電話を竜彦に返した。竜彦は電話を切つてボクシトに入れたがと言つた。「ゆう子ちゃんの家はどんな家族なんだ？どうして、みんないっしょに病気になるのだらう？ゆう子ちゃんのおいちゃんか病氣、おじさんは事故で入院、お母さんも病院。どうしたらいいんだ？困つたなあ。ゆう子ちゃん、そのかばんの中にお父さんの親戚の住所や電話番号が入っていない？それからお母さんの会社の電話番号。ゆう子ちゃん、今日は学校、どうする？休む？じゃ、学校に電話をしなればいけない。ほくも会社どうしようかな。仕事、忙しいんだよ、困つたな。」

(5)

千絵は目をさますだらうか？

千絵の会社の人は助けに来てくれるだらうか？

竜彦は、ゆう子の大きな車を車に乗せてから、車に乗つた。「ゆう子、ゆう子は前に乗せてもらいなさい。ほくは、この広い後ろの席にひとりで座らう。」

「あ、アメリカでは、子供は前の席に座つてはいけないのです、ミスター・ノザギ。」

「あ、そうですか。キヤサリン、ほくをタジと呼んでください。」

「タジ？ はい、わかりました。では行きましょう。」

大きくて青いリンカーンが走りだした。

木が多くて静かな街の中には、車が少ない。人もあまりいない。街を通り、それから

川のそばを走つて、橋を渡つた。

「きれいねえ。きれいねえ。」とゆう子が窓の外を見ながら言う。

「うん、静かでいいところだなあ。」と竜彦も窓の外を見ている。

い^い声^{こゑ}で言^いつた。「キヤサリ^{きやさり}へおは^おさん^{さん}ですか。」

「へー、ゆう^{ゆう}子^こ。」と女^{じょ}性^{せい}が大^{おほ}きい^い声^{こゑ}で答^{こた}えた。

「アイ アム タシヒコ ノザキ。ヘウ ドウ エウ ドウ」と竜^{たつひこ}彦^{ひこ}は言^いつた。

「はじめまして。キヤサリ^{きやさり}へ・テーラー・カサシヤ^{かさりや}です。」とキヤサリ^{きやさり}へはきれいな日^に本^{ほん}語^ごでゆづ^ゆり^り言^いつた。

三^{さん}人^{にん}はキヤサリ^{きやさり}へ^への車^{くるま}のほろく歩^{ある}いた。

大^{おお}きくて青^{あお}い車^{くるま}の前^{まえ}でキヤサリ^{きやさり}へ^へが「ちあ、ちあぞ。」と^い言^いいながらドアを開^あけた。

「すい^{すい}車^{くるま}ね。おは^おさん。この車^{くるま}はリ^りカー^かー^ー。」ゆう^{ゆう}子^こは嬉^{うれ}しそうに車^{くるま}に乗^のつた。

「エウコ、わ^わたしはキヤサリ^{きやさり}へ。キヤサリ^{きやさり}へと呼^よんでください。」

「はい」とゆう^{ゆう}子^こは広^{ひろ}い車^{くるま}の中^{なか}を見^みながら言^いつた。

竜^{たつひこ}彦^{ひこ}とゆう^{ゆう}子^こは千^ち絵^えの病^{びやう}室^{しつ}に^いる。ゆう^{ゆう}子^こはか^かば^ばん^んから中^{なか}のものをひとつひとつ出^でて見^みて^いる。財^{さい}布^ふ、銀^{ぎん}行^{こう}の通^{つう}帳^{ちやう}、カ^いー^ード、印^{いん}鑑^{かん}、鍵^{かぎ}など^{など}が椅^い子^すに並^{なら}んでいる。

「おじ^{おじ}さん、お母^{おかあ}さんの会^{かい}社^{しゃ}の電^{でん}話^わ番^{ばん}号^{ごう}があ^あつた。」手^て帳^{ちやう}をか^かば^ばん^んから出^でて、会^{かい}社^{しゃ}の電^{でん}話^わ番^{ばん}号^{ごう}を見^みつけ^て、ゆう^{ゆう}子^こが言^いつた。

「この会^{かい}社^{しゃ}か？何^{なに}を^をする会^{かい}社^{しゃ}？」

「フア^ふシ^しヨ^よン^んシ^しヨ^よーとかパ^ぱー^ーテ^てィ^いーとかを^をする会^{かい}社^{しゃ}よ。おじ^{おじ}さん^{さん}は？」

「ほくはコ^こン^んピ^ぴョ^ョー^ータの会^{かい}社^{しゃ}。」

「ゲ^げー^ームを^を作^{つく}るの？」

「うん、ゲ^げー^ームも^も作^{つく}るよ。」

手^て帳^{ちやう}を持^もつて^てい^いるゆう^{ゆう}子^こに竜^{たつひこ}彦^{ひこ}は言^いつた。

「次はお父さんの親戚だ。手帳の中に名前がないか？電話番号はないか？」

「ない。」

「ない？じゃ、その手帳を見せて。ほくが探そう。お父さんの名前は？」

「知らない。」

「知らない？じゃ、探せないな。では、お母さんの会社に電話をしよう。」と言って竜彦は携帯電話をポケットから出し、ボタンを押した。それから、竜彦はあちこちに電話をした。

「ゆう子ちゃん、お母さんの会社の人はいずれも来られないそうだ。それから、ゆう子ちゃん

の学校の先生に電話をしておいた。今日は休み、と言っておいだから大丈夫だ。」

「おじさんの会社は？」

「ああ、電話をしたよ。」

ゆう子はどこへ行くのだらう？

ゆう子は幸せになれるだろうか？

飛行機がアメリカ、オレゴンのポートランド空港に着いた。竜彦とゆう子が飛行機を降りた。

「おじさん、アメリカに来てしまったね。」

「うん、ゆう子を送りにアメリカまで来てしまった。」

「よかつたじゃない。九州にも行けたし、今度はアメリカまで来られて。」

「よかつた？会社をやめさせられたんだよ。ま、これが最後だ。これでゆう子とわたしはな

い、だからね。ゆう子、いい子にして、おじさんとおばさんに可愛がってもらいたいよ。」

「うん。あ、あの人、ギヤサリへおばさんよ。写真で見たいことがある。」

「ギヤリにジーンズの背の高い女性がゆう子に手を振りながら、こちらへ来る。ゆう子が大き

(8)

からないみたいだね。」

「そう。前のことは忘^{わす}れない。でも、新しいことは覚^{おぼ}えられないみたい。」

「ゆう子^こを手^て絵^えさんだと思^{おも}っている。」

「うん。」

「ゆう子のお父^{ちち}さんのことはよくわからないみたいだね。」

「おじいちゃんはお父^{ちち}さんにもあまり会^あったことがなかったから。おじさんを私^{わたし}のお父^{ちち}さんだと思^{おも}っている。おじさん、いいじゃないか。おじさんはお母^{かあ}さんと結^{けっ}婚^{こん}したかったのだから。」

「そうだねえ……。いめんね。お父^{ちち}さんになれなくて。オレゴンは寒^{さむ}いよ。北^{ほく}海^{かい}道^{どう}と同^{おな}じくらい寒^{さむ}いよ。」

「うん。九^{きゅう}州^{しゅう}に住^すめたらよかった……。九^{きゅう}州^{しゅう}のほうが暖^{あた}かいから。」

「大丈夫^{だいじょうぶ}？」

「うん……。結^{けっ}婚^{こん}していないのに、どうしてそんなに親^{しん}切^{せつ}にするのかって言^いわれたよ。」

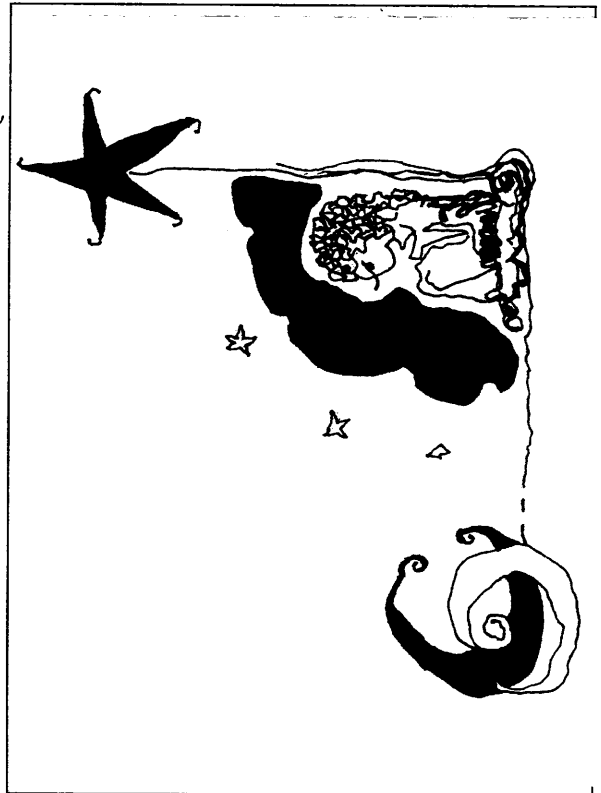
「そう……。ねえ、おじさん。きのうお母^{かあ}さんと結^{けっ}婚^{こん}したと思^{おも}ったらどう？ そうしたら、おじさんがお母^{かあ}さんや私^{わたし}のために会^{かい}社^{しゃ}を休^{やす}んでも変^へじやないでしょう。」

「うむ、そうだね。そうしようか。よし、じゃ、

そうしよう。ゆう子、まず、朝^{あさ}飯^{はん}だ。

朝^{あさ}飯^{はん}を食^たべに行^いこう。」

「おじさん、どうしてゆう子^こって言^いうの？ 今^{いま}



までゆう子はんって言うていたのに。」

「お母さんとおじさんは昨日結婚したんだ。だから、ゆう子はほくの子供だ。ゆう子、ちあ

朝「飯だ。」はんを食へに行「う。」

二人は病室を出た。

朝「飯を食へて、二人はまた病室へ行つた。

千絵は寝たまままだ。目をさまさない千絵をを心配そうに見て、ゆう子が言った。

「おじさん、お母さんはいつ目がさめるの？」

「手術が終わってから時間……。はやく目がさめるといいね。」

その時、だれかが病室のドアを静かにノックした。竜彦はドアを開けると、背の高い優

しそうな女の人が、大きいかばんを持って立っていた。竜彦は女の人を見て、「やあ。

る？」

「アメリカにいるのよ。」

「アメリカ？　ほあ、アメリカか。そうか。アメリカにいるのか。で、千絵、千絵は北海道に帰

るのか？」と将之介は言つて、竜彦を見た。

「あなた、すみませんが、千絵をお願いします。」

「はあ……。」

「おじちゃん、一人になつてしまふね。ごめんさい。私、大きくなつたらおじちゃん

の世話をするから、それまで待つていてね。」

「あ、私は大丈夫だ。登妻子が来てくれるから。」

竜彦とゆう子は、病院を出た。バスを待ちながら、竜彦が言った。

「おじちゃん、おばあちゃんもお母さんもお母さん源之丞おじさんわかるのに、今のことがわ

子はバスに乗って、将之介のいる病院へ行つた。

「おじいちゃん、さようならを言いに來たの。」

「ああ、千絵、北海道に帰るのか？ 私、家にも帰りたい。登美子はどこにいる？ 私、家にも帰るよ。登美子、登美子、いっしょに帰ろう。登美子はどこにいる。」

「おじいちゃん。」とゆう子は静かに言った。

「わたしはゆう子。わたし、アメリカへ行くの。」

「えっ？ アメリカ？ どうしてアメリカへ行くの？ 勉強しに行くのか？ そんなに小さいのに、アメリカへ勉強しに行くのか……。」

「おじいちゃん、わたし、源之丞おじさんの家へ行くの。」

「源之丞おじさん？ 源之丞おじさん？ 源之丞……。ああ、源之丞。源之丞はどこに

来てくれてありがとう。」と言った。

竜彦は女の人を病室の外の椅子に連れて行き、昨日の夜から今までのことを話した。

「頼みます。来てくれて本当に助かるよ。」と言いながら、竜彦は立ち上がりは女の人を

病室へ入れた。病室では、ゆう子が疲れた顔で千絵を見ている。千絵はまだ寝ている。

「ゆう子ちゃん、こちら、ぼくのお母さんだ。野崎保子。ぼくたちを助けるために東京から来てくれた。」

「まあ、かわいいわね。ゆう子ちゃん、こんにちは。」

「ゆう子ちゃん、これから家に帰って休みなさい。このおばさんをいじめちゃだめだよ。」

「いじめる？ いじめたりしないわね。ゆう子ちゃん。」

「ぼくはゆう子ちゃんにいじめられているんだ。」と言いながら、竜彦は財布からお金を出し

だ。「母さん、これ。」

「大丈夫よ、私も少しお金を持っているから。」と保子が言った。

「いや、必要なお金は今はほくが出ず。けれど、後でこの千絵さんから返してもらおう。だから、このお金をタクシーや食事に使つてほしい。」

「じゃ、もらつていくわ。」

ゆう子と保子がゆう子の家に帰り、竜彦は一人、千絵の病室に残つた。

千絵が苦しそうな声を出した。竜彦は驚いて千絵を見た。とても苦しそうな顔だ。竜彦は急いで、看護婦を呼んだ。看護婦は千絵を見て、大急ぎで医者を呼びに行った。竜彦は心配になつた。医者と看護婦が病室に来た。竜彦は静かに病室を出た。

看護婦と医者が出てきて、竜彦に言った。

葬式が終わり、家の中は静かになつた。

「疲れたね、お茶でも飲みましょう。」と登美子はゆう子に言つて、立ち上がった。が、「あ」と言つて倒れてしまつた。

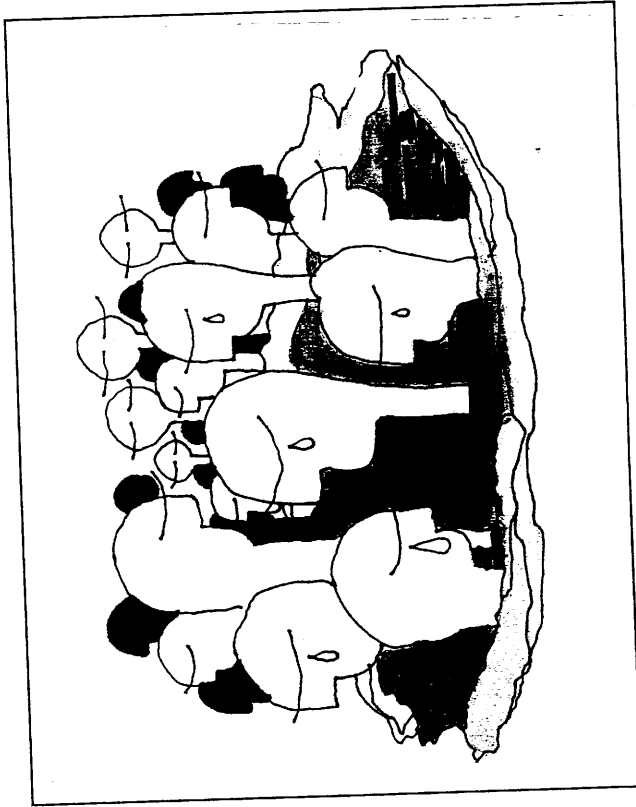
「おはあちゃんー」ゆう子が驚いて登美子を見た。

次の日、登美子の家の大きい部屋にたくさんの方がいる。ゆう子も竜彦といっしょにいる。

ゆう子の隣に将之介が座つてゐる。登美子の葬式が始まつた。みんな、黒い服を着ている。小さいゆう子を見て泣く人もゐる。

葬式が終わつた次の日、家の中はとても静かだ。家に登美子はもういない。将之介もいない。

「そあ、おじいちゃんにさようならを言ひに行つた。」と竜彦がゆう子に言った。竜彦とゆう



みんな、黒い服を着ている。将之介が大きい声で登美子に言った。「おい、登美子、千絵はどこだ。たくさんの人が来ているのに、どうして千絵はいないのだ。千絵を呼ばなさい。おい、千絵、みなさんに挨拶をなさい。」登美子は困った顔をして、竜彦を見る。みんなも困った顔をしている。

「おじいちゃん、お母さんはあそこ。あそこにいるの。」とゆう子が白くて小さい箱を指さす。

「まだ、血がたくさん出ました。とても心配です。」

「大丈夫でしょうか。」

「大丈夫？ わかりません。心配です。家族や親戚の方を呼んでください。」

竜彦は千絵の病室に入った。千絵の顔は青くて、死んでいるようだった。

(6)

千絵は元気になるだろうか。

竜彦は会社へ、ゆう子は学校へ行けるだろうか。

小さくて白い箱をもってゆう子が車に乗っている。運転しているのは竜彦。二人は黒い服を着ている。「お母さんは骨になってこの箱に入っている。お母さん、こんなに小さくなってしまった・・・。」

「ん・・・」竜彦は何と言ったらいいかわから
ない。

「私、一人になってしまった・・・。」

竜彦はゆう子の肩を抱いた。

「私、どうなるの？」

「これから飛行機に乗って九州のおばあちゃん

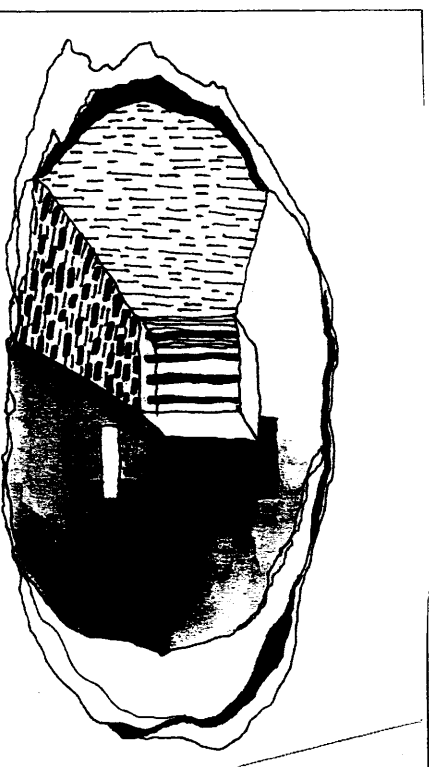
の家に行く。おばあちゃんがゆう子のためににか

考えてくれるよ。」

「でもおじいちゃんは病気でしよう。おじい

ちゃん病気、悪いんだって。おばあちゃん

若くないし、私が行ったら、おばあちゃん



をトイレへ連れて行った。

ゆう子は台所へ行き、掃除を始めた。そして、冷蔵庫から氷を出して、登美子の足の上
においた。

「千絵はやさしいなあ。やさしいいい子だ。」と将之介はゆう子を囁しそつに見た。

竜彦は、3人を驚いて見ている。

(7)

ゆう子は九州にいることができるだろうか？

登美子は元気でゆう子の世話をすることができただろうか？

次の日、登美子の家の大きい部屋にたくさんの方がいる。ゆう子も竜彦といっしょにいる。
登美子の隣に将之介が座っている。千絵の葬式が始まった。

「子供には親が必要ですよ。一郎さん、あなたの二両親との問題があります。けれど、

子供には親が必要ですよ。連れて行ってください。」

竜彦は困った顔をしている。

登美子と言った。「そうねえ。でも、ゆづりはそんなに小さいから、私が世話しますよ。小さい子供には女の子の人が必要ですから。」

将之介は「うん、そうだな。」と言って立った。

登美子も立って、台所へ行き、熱いスープを茶碗にいれようとした。

その時、将之介の声が聞こえた。「ああ、ムダ、ムダ。」

「あ、そこは違います。トイはあつち、あつち。あつち！熱い！」

熱いスープの入った茶碗が登美子の手から落ちた。茶碗が割れた。登美子は急いで将之介

大変になるよ。」

「じゃ、アメリカへ行く？アメリカのオレゴンへ行く？」

「おじさんは事故にあつて今、病院にいる。」

「すぐ元気になるよ。」

「わからない。元気にならないかもしれない。おばさんはアメリカ人だし、私は英語がわからないし……。」

「うーん。でも、ゆづりは若いから、英語をすぐ覚えらるよ。」

「わかすぎるわ。」

ゆづりは悲しそうに竜彦を見た。竜彦はゆづりを強く抱いた。

九州の空港に飛行機が着いた。飛行機から白くて小さい箱を大事そうに持ったゆづり

とおお 大きいかばんを持った竜彦が出てきた。「お母さん、九州に着いたよ。」とゆう子は白くて小さい箱に話しかけた。

一人は空港からバスに乗った。竜彦もゆう子も九州に来たのは初めてだった。バスを降りて二人は古い大きな家の前に立った。ゆう子がドアを開けようとした時、中かららるりとした音がして、女の人が出てきた。髪が少し白くなっているが、千絵に似たきれいな人だ。千絵の母、登美子だ。

「あー、ゆう子ちゃん、よく来たね。大変だったね。」登美子はゆう子を抱いた。それから竜彦を見て、「本当にお世話になりました。すみませんでした。」あ、主人が出てしましまして。今、警察から電話がありましたので、主人を迎えに行ってきます。ゆう子ちゃん、疲れたでしよう。冷蔵庫の中にジュースが入っているから。

「ええ、ええ、ゆう子ちゃん。ゆう子ちゃんはおはあちゃんこの家にいましょう。」と登美子が言った。

「あなたもここにいでしよう。」と将之介が竜彦にきいた。

「いえ、私は仕事がありますから、お葬式が終わったら北海道へ帰ります。」

「帰る？北海道へ？葬式が終わったら、葬式？」将之介はよくわからないようだった。が、

「では、この子連れて行ってください。」と竜彦に言った。

「えっ？いえ。ゆう子ちゃんのお母さん、千絵さんがなくなりましたから、私はゆう子ちゃんを一人連れてきました。明日、千絵さんのお葬式ですね。お葬式が終わったら、私

はひとりで北海道へ帰ります。」

将之介は怖い顔をして言った。

竜彦が言った。

「九州は暖かいですね。北海道はまだストーブを使っています。」

「ほお。あなたは北海道からいらつしやいましたか？」

「おじいちゃん、このおじいさんは北海道から私を連れてきてくれたのよ。」とゆう子が言った。

「うん？ おお、千絵、いつ帰ってきた？ 千絵は北海道へ行ってたのか。」

竜彦はびっくりして将之介を見た。登美子は困った顔をしている。

「おじいちゃん、私はゆう子。」

「うん？・・・あ、ゆう子、ゆう子か。よく来た、よく来た。千絵はどこだ？」

ゆう子はちよつと心配そらに登美子を見た。が、

「おばあちゃん、私、この家にいてもいい？」と言った。

飲んでね。」

登美子はそう言いながら、黄色い車に乗って出て行った。

竜彦は何がおこったのかわからない。ゆう子が話した。

「おじいちゃんは頭の病気なの。だから一人で出かけると、帰れなくなるの。おじいちゃんが出かけると、おばあちゃんは探さなければならない。大変なの。」

「そうか……。それは大変だなあ。」

小さいゆう子がこの人たちと、九州に一緒にいることができるのか？ 竜彦は心配になった。

夜、竜彦はゆう子といっしょに食事をしている。登美子もいっしょに食っている。千絵の父

でゆう子の祖父、将之介もいっしょだ。将之介の髪は真っ白。

将之介は竜彦とお酒を飲んでいる。